

和語動詞連用形之接尾詞化現象

—以「～mamire」為例—

陳世娟

東吳大學日本語文學系 副教授

摘要

本文利用複數的語料庫，探討了和語動詞「mamireru」之連用形「mamire」當作接尾詞來使用的語言現象。特別是透過『yomidas 歷史館』所蒐集的「～mamire」用例分析後，釐清了其使用頻率逐漸增加的事實；再將其與「～darake」比較分析後，得知「～mamire」與「～darake」乃處於相互競爭的關係，兩者用法有相似之處但也各自擁有不同的前接詞。

另外，「～mamire」因其原本動詞之動作性影響了「～mamire」的語意，可將「～mamire」的語意還原為「～ni mamireru / ～ni mamireteiru」。而「～darake」的結構是「名詞＋接尾詞（darake）」所形成的複合語，並沒有「～mamire」的動作性，僅止於表現出「某某地點上存在著許多的某某東西」這種靜態現象的描述。「～mamire」則是動態性的描述「某某人在某地點附著了許多東西」，甚至擴展為「比喻的用法」「誇大的用法」，因此用法也更多樣化了。所以產生接尾詞化的「～mamire」除了與相似詞「～darake」之間，各自分工其語意及用法外，也逐漸出現增強的傾向。

關鍵詞：動詞連用形 接尾詞化 yomidas 歷史館 語言之消長
語意之變化

受理日期：2015.03.13

通過日期：2015.10.30

**The Phenomenon of the Suffixation of
Japanese Verbal Rennyōkei
—Using 「～mamire」 as an Example—**

Chen, Chyh-Jang

Associate Professor, Department of Japanese Language and Culture,
Soochow University

Abstract

This paper studies the phenomenon of the mamire rennyōkei of Japanese verb mamereru used as suffixation, especially by studying the usage examples of 「～mamire」 collected by Yomidas Rekishikan (Yomidas History Museum) to clarify the fact of its increasing usage. And after the analysis of 「～darake」, we learn that 「～mamire」 and 「～darake」 are in a competing relationship; they have some similarities but they have different prepositions.

Furthermore, because the action quality of its original verb influences the meaning of 「～mamire」, we can trace back its meaning to 「～ni mamereru / ～ni mamireteiru」. On the other hand, the structure of 「～darake」 is a compound word composed of 「Noun+Suffixation(darake)」 without the action quality of 「～mamire」 and only shows the static phenomenon that there are many something at a certain place. 「～mamire」 is dynamic description that there are many something at a certain place on someone, even expanding to simile which becomes more various. The suffixation of 「～mamire」 and similar usage 「～darake」 keep working in different ways on their meaning and usage. This tendency keeps going stronger.

Keywords: Verbal Rennyōkei Suffixation Yomidas Rekishikan
Language Growth and Decline Symantic Changes

和語動詞連用形の接尾辞化現象 —「～まみれ」を例として—

陳世娟

東呉大学日本語文学系 副教授

要旨

本稿では、和語動詞「まみれる（塗れる）」の連用形「まみれ」の接尾辞化現象について、複数のコーパスを利用して、その考察を行った。とくに『ヨミダス歴史館』における「～まみれ」の用例を通して、その使用度数が増加傾向にあるということを明らかにした。また、「～だらけ」との比較から、「～まみれ」と「～だらけ」は競合関係にあると考えられるが、両者は似ている用法もあれば、それぞれ異なった前接語と結合する場合もあることもわかった。

なお、「～まみれ」は「に塗れる／に塗れている」のように還元でき、本来の動詞の動作性が、「～まみれ」の意味を左右している。一方、「～だらけ」は「名詞＋接尾辞（だらけ）」によって構成された複合語で、「～まみれ」のような動作性がなく、「どこどこに何かがたくさんある」といった静的状態の描写となっている。「～まみれ」は「だれだれ（どこどこ）に何かがたくさん付着している」といった動的状態の描写から、さらに「比喩的な用法」「誇張した言い方」へと、用法の幅を拡張してきている。接尾辞化している「～まみれ」は、類義語である「～だらけ」と意味分担を果たしながら、近年徐々に抬頭してきたと考える。

キーワード：動詞連用形 接尾辞化 ヨミダス歴史館 言葉の消長
意味の変遷

和語動詞連用形の接尾辞化現象¹

—「～まみれ」を例として—

陳世娟

東呉大学日本語文学系 副教授

1. はじめに

和語動詞連用形は多彩な用法を持っている。そのままの形で名詞に転化したり、造語成分として複合語を形成したりする。さらに、「～付き」「～ぐるみ」のように、すでに接尾辞として使われるものも見られる。しかし、すべての動詞連用形が接尾辞化するわけではない。たとえば、「～付き、～ぐるみ、～尽くし、～張り、～作り、～巡り、～まみれ」が動詞連用形の接尾辞的な用法としてあげられる。『新明解国語辞典』第七版（2013）では、「付き」「ぐるみ」は明確に接尾辞と示されているのに対し、「尽くし」「張り」「作り」「巡り」「まみれ」は接尾辞とは示されていない。

このように、動詞連用形が名詞として使われたり、造語成分として使われたり、さらには、接尾辞として使われたりしている。つまり、これらの造語成分には段階性があるといえる。上述の通り、「～つき」「～ぐるみ」のように、すでに接尾辞として使われるものも見られるが、「まみれ」は「～まみれ」の用法があげられるにもかかわらず、辞書における説明が足りていないと思われる。そこで、本稿では「～まみれ」に着目して、1) その接尾辞的な意味・用法について考察を行い、2) 「～だらけ」との比較を通してその意味特徴や接尾辞化させる要因・言葉の消長を明らかにすることを目的とする。

2. データの収集と調査の手順

用例収集にあたっては、『ヨミダス歴史館』²や『現代日本語書き

¹ 本稿は103年度の科技部研究助成（助成番号 MOST 103-2410-H-031-028-）による研究成果の一部である。

² 『ヨミダス歴史館』は、明治からの読売新聞記事 1,200 万件以上がネットで

言葉均衡コーパス』(略称 BCCWJ)を中心に、毎日新聞(1996～2005の10年分)のデータファイル、『新潮文庫の100冊』CD-ROM版をテキスト化したもの、CASTELJ(日本語教育支援システム)が配布したCD-ROM所収の「書籍」のデータも併せて利用した。手順としては、まず、「まみれ」と動詞形「塗れる」のプロトタイプの意味・用法を『日本国語大辞典』などで語釈や関連用法を確認しておく。そして、文法書における「～まみれ」と「～だらけ」の用法解説を取り上げ、実際の用例と照らし合わせながら、それぞれの用法や意味特徴を検証していく。なお、『ヨミダス歴史館』の検索によって「～まみれ」の用例を収集して、年代別に考察する。さらにこの言葉の消長を観察、分析しながら、「～まみれ」の意味特徴を再確認する。これらの手順によって、「～まみれ」の接尾辞化の傾向を検証する。

3. 先行研究

「接尾辞」について、『日本語学研究事典』(2007)では、「語構成要素の一種。(略)接辞の有する機能には、(1)語の品詞を決定する、(2)語基に何らかの意味を付与する、の二種類が存在するが、接頭辞は基本的に(2)の機能しか有さないのに対し、接尾辞は(1)(2)の機能をともに有することができる。」と説明している。野村(2010)では、単語を構成する要素としての語基と接辞を、次のように定義している。

語基……単語の意味的な中核となり、それだけで単語となることもある。

接辞……つねに語基と結合して、単語の構成要素となり、形式的な意味をそえたり、単語の品詞性を決定したりする。

日本語においては、「名詞+動詞連用形」型の複合語は非常に生産的である。この点については、玉村(1985)西尾(1988)影山(1989)

読めるデータベースである。今回の用例収集にあたって、「～まみれ」の用例は2014年8月31日までの新聞記事を対象に検索したものであるが、「～だらけ」は用例数が大量であるため、その用例を1996年1月1日～2005年12月31日に絞って検索して収集した。

も指摘している。影山（1989）では、このタイプは基本的には語根＋語根であり、例えば、「山登り」を「*冬山－登り」や「*山－駆け登り」とすることはできない。しかし後項の動詞によっては、かなり生産力の強い場合もあり、「金集め」に対して「資金集め、政治資金集め、〔選挙資金ないし政治資金〕集め」のように前項が語幹や語に拡張することが観察されると論じている。しかし、このような言語制限においては、どのタイプの動詞が自由で生産的なのか、言及していない。このように後項成分としての動詞連用形についてはまだ解明されていない点が多い。以下、関連する先行研究について述べておく。

3.1 山下（1994）（1995a）（1995b）

和語動詞連用形の国語辞典における品詞表示は、辞書によって「名詞」「造語成分」「接尾語」と揺れが見られる。つまり、造語成分と見なすか、それとも接尾辞と見なすか、その境界線が曖昧であるといえる。

山下（1994）（1995a）（1995b）では、国語辞典における「造語成分」と「接尾辞」の扱い方について、一連の研究があげられる。山下（1994）では、国語辞典が意味を担う要素という意味で語基と接辞との中間的な語構成要素として「造語成分」を設定、そして、「造語成分」が接辞に比べ、より実質的な意味を表すものである、という点から接辞と区別していると論じている。山下（1995a）では、国語辞典を資料として非自立的な語構成要素がどのように扱われているかを立項と品詞表示の二点に焦点を絞り調査分析した。国語辞典において、ある非自立形態を「接辞」「造語成分」と区別して表示することにどれほどの情報価値があるのか、また、接辞と造語成分の境界が非常に曖昧であるため、国語辞典によって見解に相違が生じると指摘している。山下（1995b）では、語の構成要素は「自立形式と結合形式」「語基と接辞」という対立だけで捉えられるものか、国語辞典の造語成分が語の構成要素としてどのような性格を有するものであるかを接辞との対照を通して考察を行った。そして、国語辞典における

造語成分は構成単位からみて、形態素³と単語の中間の位置するもので、語基から接辞へと連続的に位置する語構成要素ということになると分析している。

3.2 杉岡（2005）（2006）

杉岡（2005）では、品詞条件に支えられた生産性をもつものに対して、「一ぶり」は接辞固有の意味と結合できる語であれば品詞を選ばずに様態名詞を作るので、意味条件による生産性ということができらるだろうという結論を出している。また、「一さ」と「一方」は互いに競合することがないが、「一さ」と「一ぶり」は名詞化接辞の競合関係が観察されると主張している。なお、なぜ形容詞と「一ぶり」の結合が形容名詞などと比べてむずかしいのか、またこれは一般的なブロッキング（語彙的阻止）に当てはまらず方向が逆であることなど、検討が必要であるとしている。この示唆を受けて、本稿の考察対象である「～まみれ」と類似している「～だらけ」の用法が存在していることを無視することはできない⁴。

また、杉岡（2006）では、「語の意味構造や接辞の意味特徴にもとづく語形成は、語の詳細な語彙情報や認知的情報などが要因となって、造語力が制限されたり、複雑な意味特徴を示すものが多い。語形成の意味と、その規則性と語彙性の解明には、統語と意味の両方の要因が必須である。」と述べている。

3.3 神作（2009）

神作（2009）では、「～だらけ」「～まみれ」の動向について、スポーツ紙の website からの用例を分析・考察している。たとえば、「借金だらけ」「借金まみれ」のような比喩的な用法では、後者の方

³ 形態素とは、意味を担った最小の単位である。（山下 1995）

⁴ 「だらけ」を『時代別国語大辞典 室町時代篇三』で調べてみると、次のように記載されている。だらけ（接尾）名詞について、そのものが目立って多くて、ほとんど全体をおおい尽くしている感じがするさまである意を表わす。望ましくない状況を作り出しているものについていう。「Daraqe（ダラケ）。或る名詞に連接して、物の多数を意味する助辞。例、「毛ダラケナ者」。非常に毛むくじゃらナ人。「学文ダラケ」。多くの学問、など（日葡）。このように、「だらけ」は室町時代にはすでに使われる語であるが、「まみれ」は記載されていないことがわかった。

が目立っているように感じられ、「～だらけ」が担っていた部分に「～まみれ」が進出してきたと指摘している。なお、前接語「～こと」「～ところ」「～もの」は「～だらけ」の方にのみ現れ、これらは抽象度が高く、その中身は文脈に依存することになる。「～だらけ」は抽象度が高いものものに付く、逆に言えば、抽象度が高いものに、「～まみれ」は付かない（付きにくい）と分析している。そして、「インパクトの強さや事態のはなはだしさ」を想起させる「～まみれ」の用法が増加していると主張している。これらの指摘をも参考に、本稿で「～まみれ」の「接尾辞化」現象を検証していく。

3.4 陳（2013）

陳（2013）では、語構成的に「名詞＋動詞連用形」型の複合語の透明度について、考察を行った。語と語の結合関係を意味の透明度によって、6つの分類を試みた。そのうち、接尾辞化するものはいくつか見られる。たとえば、「～つき」の形式では、「足つきの鉢」と「よろよろした足つき」のように「足つき」は語基となるものと接尾辞となるものに分かれる。同様に「化粧崩れ」や「役者崩れ」のような複合語では、前者は意味が実質的で明確なもの、後者は文法的な意味合いをもつものであり、「～くずれ」の形式は語基となるものと接尾辞とがあると論じた。

以上の先行研究を踏まえて、「～まみれ」を対象に、その接尾辞的な用法とその意味特徴を解明していく。

4. 辞書における「塗れる」「～まみれ」と文法書における解説

4.1 辞書における「塗れる」と「～まみれ」

表1では、『日本国語大辞典』をはじめ、『角川古語大辞典』、『大辞林』『大辞泉』『新明解』『明鏡』を資料として「塗れる」と「まみれ」の語釈をまとめたものである。

表1 辞書における「～まみれ」の語釈

辞書	語釈	
	塗れる	まみれ
『日国』	「塗れる」 (1)血、汗、泥、ほこりなど、きたないものが一面についてよごれる。(2)おちぶれた状態、けがれた境遇などに陥る。	「まみれ」〔語素〕(動詞「まみれる(塗)」の連用形から) 他の語の下に付いてそのものがついたりしてよごれる意を表わす。「汗まみれ」「血まみれ」「泥まみれ」など。
『角川古語大』	まみ・る【塗】動ラ下二 ①血・泥などが一面に付いて、汚れる。「血にまみれたるをとこ、前に来て」〔大和・一四七〕「立たる儘に仰反 のけそり て、沙石 いさご に塗 まみ れて掙 も たり」〔俠客伝一・三〕②落ちぶれる。沈淪する。「家業淪滑 マミレ たり」〔醍醐寺本遊仙窟・訓〕	記述なし。
『大辞林』	まみ・れる 国【▽塗れる】(動ラ下二) ①汚いものが一面につく。たくさんついてよごれる。「汗に一・れる」「血に一・れる」②落ちぶれる。〔名義抄〕慣用 一敗地に―	まみれ【▽塗れ】他の語の下に付いて、そのものがべったりついてよごれる意を表す。「ほこり―」「血一の男」
『大辞泉』	〔動ラ下二〕〔文〕まみ・る〔ラ下二〕1 泥・汗などが一面にくっついて汚れる。「泥に一・れる」「汗に一・れる」→一敗地に塗れる 2 問題を多く抱えて困った状態である。「汚名に一・る」	〔語素〕名詞の下に付いて、そのものが一面に汚らしい感じでついていることを表す。また、困った状態であることを表す。「垢(あか)―」「汗―」「ほこり―」「借金―」
『新明解』	まみ・れる 国(自下一)〔血・汗・泥・ほこりなど〕汚い物が一面に付 マミ く(いて、よごれて見える)。「ほこりにまみれた古本/一敗、地に―〔=ひどい負け方をする〕名 まみれ 国「泥一のズボン」	記述なし。
『明鏡』	まみ・れる【塗れる】【自下一】あるものが一面にくっついて汚れる。「ズボンが泥に―」「手が血に―」「汗に一・れて働く」「手あかに―れた本」「一敗地に―」表現「汚辱〔俗塵(ぞくじん)に―)』など、抽象的なものに転用する。国 まみ・る(下二)	記述なし。

表1で示されているように、「塗れる」については、どの辞書も「汚いものが一面につく」とあるが、「まみれ」はすべての辞書には掲載されておらず、しかも、「語素」として扱われている。つまり、「まみれ」は接尾辞としては認められて

おらず、単なる造語成分であることがわかる。

4.2 文法書における解説

前節では、国語辞典における「まみれる(塗れる)」と「～まみれ」の語釈を何冊かの辞書によって確認した。本節では、日本語教育の立場において、「～まみれ」と「～だらけ」がどのように扱われているかを『日本語教育事典』(1987)『日本語文法大辞典』(2001)など5冊の文法書を通して確認する。その内容は表2のようになる。

表2 文法書における「～まみれ」「～だらけ」に関する記述

日本語 教育事典 (1987) 大修館書店	～まみれ（記述なし） だらけ（接尾辞）（1）<u>名詞に付いて、前項成分がたくさんあることを表す。前項成分が対象物の表面が分からなくなるほど一面にその物を覆っているという感じを主に不快感を持って表現する時に用いる。「～にまみれている」「～がいっぱいある」の意。</u>（例）略（2）前項成分としては好ましくない語が多い。次のような場合でも好ましくない気持ちを表す。（例）①いい事だらけでかえって不安だ。②彼女の部屋は本だらけで全然気色がないね。（井上千恵子）
日本語 文法大辞典 (2001) 明治書院	～まみれ（記述なし） だらけ 接尾語 現代語 接統 <u>名詞や名詞句に付く。意味 そのものやそのことでどこもかしこもいっぱいである状態を表す。特に、好ましくない意味の名詞や名詞句に付くことが多い。</u>「住んでみて気がついたことだが、付近の道路や空き地はゴミだらけである」（『朝日新聞』平6・5・27朝刊）「傷だらけ」「泥だらけ」「借金だらけ」「わからないことだらけ」（秋元美晴）
日本語 文型辞典 (1998) くろしお出版	【N まみれ】 汚いものが全面に付いている状態を表す。「N まみれになる」「N まみれだ」「N まみれの」という形で用いる。「汗まみれ」「ほこりまみれ」「血まみれ」「泥まみれ」など、<u>限られた名詞にしか用いない。</u> 【N だらけだ】（1）間違いだらけの答案が返ってきた。（2）子供は泥だらけの足で部屋に上がってきた。（3）彼は借金だらけだ。（4）「傷だらけの青春」という映画を見た。（5）彼女の部屋は本だらけだ。 <u>それでいっぱい、そればかりがたくさんある様子。「…でいっぱい」と違い、話し手のマイナスの評価を表すことが多い。</u>（5）は部屋に本が非常にたくさんあるというだけでなく、多すぎたり、散らかっている感じがある。
『どんな時どう使う 日本語表現文型500』（1996） アルク / 大新書局	～まみれ【～がたくさんついている】◎名詞+まみれ ●不快な液体や細かいものが体など全体について汚れている様子。 ☞ 体そのものの変化や、ある場所にたくさんあるもの、散らかっているものなどには使わない。× 傷まみれ、× しわまみれ、× 間違いまみれ ～だらけ【～がたくさんある／～がたくさんついている】◎名詞+だらけ ☞ ふつう、目で見えるもので、よくないものに使う。 他例 ほこりだらけ、ごみだらけ、血だらけ、灰だらけ、穴だらけ
『中上級を教える人ための日本語文法ハンドブック』（2001） 株式会社スリーエーネットワーク	◆「～だらけ」は<u>全体に渡って同質のものが多量に存在していてよくない状態になっていることを表します。</u>（1）汚いなあ、この部屋。床もテーブルもほこりだらけだ。（2）ホテルの部屋には傷だらけのスーツケースが一つ置いてあった。 好ましい物が多量に存在する場合には使いません。（3）庭は花（×だらけ/〇でいっぱい）だった。比喩的に「借金、間違い」などにも使います。（4）事業に失敗して借金だらけで年も越せない。（5）間違いだらけの車選び（書名） ◆「～まみれ」は「～」が「血、汗、どろ」などの液体や「ほこり、粉」などの粉末の<u>ものに限られる点で「～だらけ」と異なります。</u>（6）このカバンは傷（〇だらけ/×まみれ）だった。（7）このころは借金（〇だらけ/×まみれ）だった。 <u>また、「～だらけ」は多量に存在すれば使えますが、「～まみれ」は裏表全体に渡ってまんべんなく付着していないと使うことはできません。</u>（8）子どもが砂場で遊んで帰ってきたので家の中が砂（〇だらけ/×まみれ）になった。（9）ぬれた手を砂に突っ込んだので手が砂（〇だらけ/〇まみれ）になった。

上述した文法書における解説によれば、「～まみれ」と「～だらけ」の意味・用法は次の表3のようにまとめられる。

表3 前項成分の意味特徴とその用法用法

前項成分の意味特徴とその用法	「～まみれ」	「～だらけ」
液体、粉末など汚いもの	✓	
量がたくさんある様子	✓	✓
一面に付着しているもの	✓	✓
マイナス評価	✓	✓
比喩的な用法		✓
名詞に付く	✓	✓
名詞句に付く		✓

表3から、「～まみれ」と「～だらけ」の前項成分（前接語）の相違点の確認ができる。どちらも「名詞に付く」「量がたくさんある様子」

子」「マイナス評価」といった点が共通している。一方、「～まみれ」は「液体、粉末など汚いもの」「一面に付着しているもの」といった点に限って使われるが、「～だらけ」はこのような制限はないと解釈している。しかし、「比喩的な用法」として「借金だらけ」は使えるが、「借金まみれ」は使えないと説明している⁵。この点は検証する必

⁵ 『中上級を教える人ための日本語文法ハンドブック』では、「(7) このころは

要がある。

上掲の文法書にはすべて「～だらけ」についての記述があるが、『日本語教育事典』（1987）と『日本語文法大辞典』（2001）には、「～まみれ」に関する記述が掲載されていないことから、「～まみれ」は「～だらけ」ほど接尾辞として認められていないようである。国語辞書と異なって、日本語教師や日本語学習者向けの文法書では「～まみれ」の意味・用法を詳しく解説しているが、まだ解明されていない点がある。そこで、実際の用例によって、意味・用法の特徴の裏づけを試みる。

以上、各文法書における「～まみれ」「～だらけ」に関する記述を概観した。以下、5節では、まず、『青空文庫』『新潮文庫の100冊』『小松左京作品集』の3つのコーパスを通して、「～まみれ」の前接語の使用状況を確認する。次に、『ヨミダス歴史館』『毎日新聞』など複数のコーパスを利用して、年代別に「～まみれ」の使用状況が増加傾向にあることを明らかにする。最後は、類義語の「～だらけ」との比較を通して、それぞれの意味・用法を観察し、さらに、『分類語彙表』に基づき、「～まみれ」の前接語の分類を試み、その意味特徴を記述する。

5. 考察

5.1 文学作品における「～まみれ」の使用状況

まず『青空文庫』『新潮文庫の100冊』『小松左京作品集』3つのコーパスを利用して、「～まみれ」の前接語の使用状況を確認する⁶。

5.1.1 『青空文庫』の使用状況

図1と図2は、『青空文庫』によって検索して得られた「～まみれ」の使用状況を示したものである。前接語は10語のみであることが明

借金 {○だらけ/×まみれ} だった。」のように述べている。(p.538) しかし、「Google」で検索してみると、「借金まみれ」の用例がかなりあった。

⁶ この3つのコーパスは、明治・大正・昭和・平成の文学作品のコーパスであるため、新聞とは異なった性格をもつものである。新聞のほか、文学作品における「～まみれ」の使用状況も合わせて見る必要があると考えた。今回利用したのは、東呉大学日本語学科が構築したコーパスに含まれるものである。

らかになった。「血まみれ」「泥まみれ」「汗まみれ」「土まみれ」「砂まみれ」「埃まみれ」「雪まみれ」「花粉まみれ」「粉まみれ」「垢まみれ」の順となっている。図 2 から、「血まみれ」(36.36%)と「泥まみれ」(33.77%)の用法が圧倒的に多いことがわかる。「汗まみれ」(9.74%)を入れると、この 3 語が全体の使用率の 79.87%を占めていることになる。

図 1

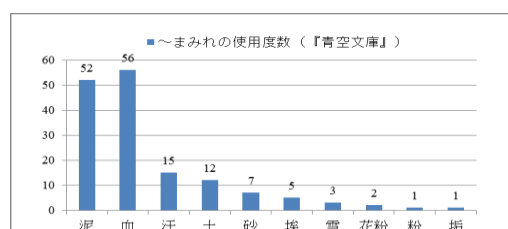
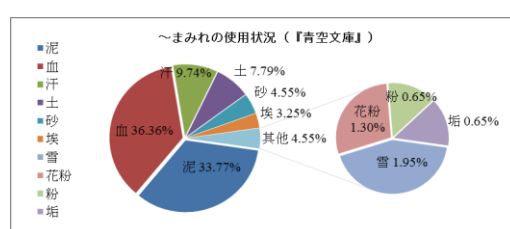


図 2



5.1.2 『新潮文庫の 100 冊』の使用状況

図 3 と図 4 は『新潮文庫の 100 冊』によって検索して得られた「～まみれ」の使用状況を示したものである。前接語は 13 語のみであることが明らかになった。「泥まみれ、血まみれ」「埃まみれ」「汗まみれ、雪まみれ」「垢まみれ」「砂まみれ」「粉まみれ、くそまみれ」「油まみれ、灰まみれ、土まみれ、インクまみれ」といった順となっている。図 4 からわかるように、「泥まみれ」(32.32%)「血まみれ」(32.32%)「埃まみれ」(10.10%)の 3 語の使用度数が全体の 74.74%となっている。

図 3

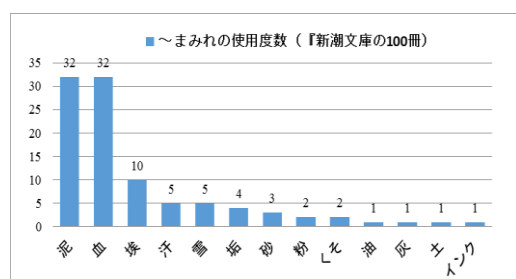
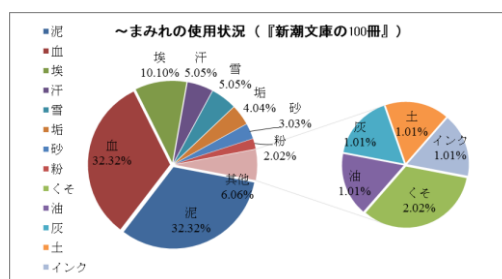


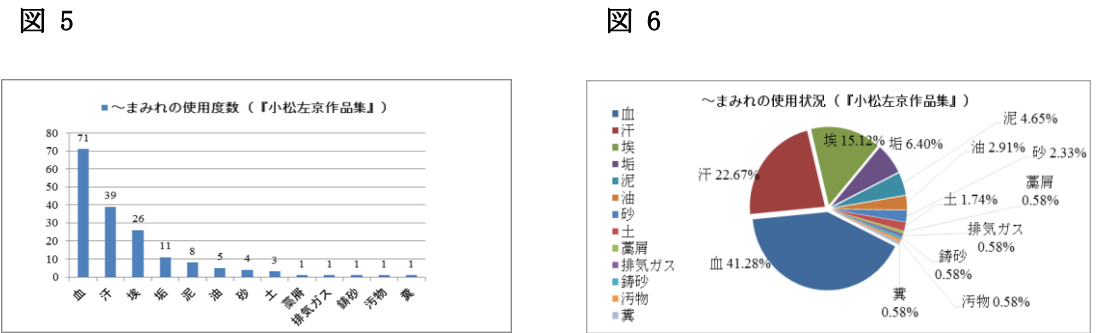
図 4



5.1.3 『小松左京作品集』の使用状況

図 5 と図 6 は『小松左京作品集』コーパスによって検索して得られた「～まみれ」の使用状況を示したものである。図 5 と図 6 で示したように、前接語は 13 語のみである。「血まみれ」「汗まみれ」「埃

まみれ」「泥まみれ」「雪まみれ」「垢まみれ」「油まみれ」「砂まみれ」「土まみれ」...といった順となっている。そのうち、「血まみれ」(41.28%)「汗まみれ」(22.67%)「埃まみれ」(15.12%)の3語が全体の79.07%を占めていることがわかる。



5.1.4 一語化したものとマイナス評価

以上、3つのコーパスから検索した「～まみれ」の用例を通して、その使用状況を確認することができた。これらの語はすべてマイナス評価の意味が含まれ、それも、上位3位の用例は「泥まみれ」「血まみれ」「汗まみれ」「埃まみれ」の4語に集中している。

表 4

「～まみれ」使用度数の高い順 (20例以上) の語の掲載状況

	日本 国語大辞典	大辞林	大辞泉	新明解 国語辞典	明鏡 国語辞典
泥まみれ	●	●	●	●	●
血まみれ	●	●	●	●	●
汗まみれ	●	●	●	●	●
油まみれ	●	×	×	×	×
砂まみれ	●	×	×	×	×
埃まみれ	●	×	×	×	×
雪まみれ	●	×	×	×	×
土まみれ	●	×	×	×	×
灰まみれ	●	●	●	×	×

「～だらけ」使用度数の高い順 (10例以上) の語の掲載状況

	日本 国語大辞典	大辞林	大辞泉	新明解 国語辞典	明鏡 国語辞典
泥だらけ	●	●	●	×	×
血だらけ	●	●	●	×	×
傷だらけ	●	×	×	×	×
皺だらけ	●	×	×	×	×
埃だらけ	●	×	×	×	×

このうち「泥まみれ」「血まみれ」「汗まみれ」の3語は、表 4⁷に示したようにすでに辞書に見出しとして掲載されていることから、複合語の感覚が薄れて、一つのまとまった語として使われていると考えてよい。

さらに、「～まみれ」の前接語は10～13語のみで、用法がかなり限られている。次に『ヨミダス歴史館』における使用状況を見ていく。

5.2 『ヨミダス歴史館』における「～まみれ」の使用状況

⁷ 表 4 は『ヨミダス歴史館』から検索した「～まみれ」「～だらけ」の頻度順前接語で、辞書に掲載されているものである。3種のコーパスの調査結果もこの結果と一致している。また、「泥だらけ」「血だらけ」「傷だらけ」「皺だらけ」「埃だらけ」も一語化したものとしてあげられる。

今回、『ヨミダス歴史館』を利用して「～まみれ」の検索作業を行った。検索期間は、明治、大正、昭和、平成（2014年08月31日まで）の期間に設定し、「～まみれ」の用例を収集して整理したものを資料として利用することとした。『ヨミダス歴史館』には、5654件の用例を見出すことができ、そのうち、1974年～1988年の件数は487件、1989年～2013年12月31日は5035件あった。2014年1月1日～2014年8月31日までは132件が検索できた。

5.2.1 年代別にみる「～まみれ」

図7によれば、「～まみれ」の使用度数の推移が明確に増加傾向にあると言える。とくに、1989年から1999年にかけて「～まみれ」の使用度数がかなり伸びたことがわかる⁸。図8は以上の検索方法で得られた「～まみれ」（1989～2013年）25年間の使用度数を示したものである。次に、年代別に「～まみれ」の使用状況を見ていく。

図7 年代別にみる「～まみれ」

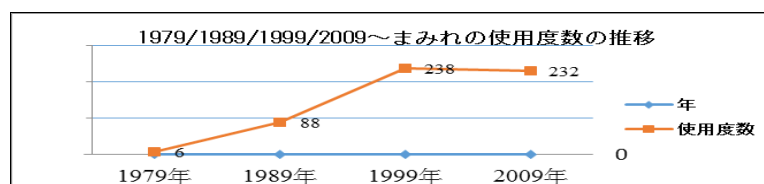


図8 「～まみれ」使用度数の消長

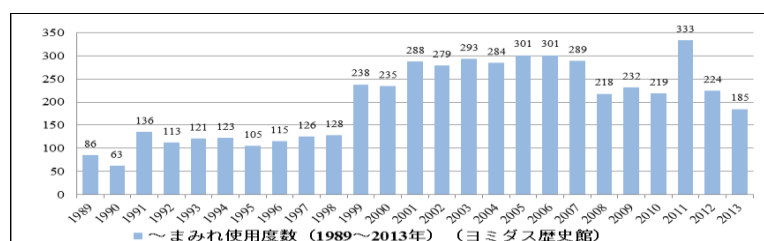


図8は1989～2013年までの「～まみれ」の使用状況であるが、その使用度数には消長がある。もっとも使用度数が多いのは2011年で、333件あった。その多くは、2011年3月11日に起きた東日本大震災による影響を受けたものだと考えられる。2011年の「～まみれ」の使用度数333件のうちの3割（101件）が震災、津波、被災者などに関連した記事に使われていることがわかった。とくに「泥まみれ」の

⁸ ただし、調査対象の分量は同程度ではないことも予想できるが、本稿では今回収集した用例数によって調べた結果を参考にした。

用例が 81 件もあった。以下、いくつか用例をあげておく⁹。

- (1) 水が引くと、泥まみれの菓子散乱していた。(2011.03.27)
- (2) がれきと化した自宅跡を掘り返すと、泥まみれのスーツが見つかった。(2011.03.31)
- (3) 2 年 1 組の教室のあった場所で、泥まみれの赤いランドセルを見つけた。(2011.03.31)
- (4) 「野菜なら何でも放射能まみれであるかのような印象を持っているお客さんもいる。(2011.03.24)
- (5) 担当者は「外国人にとって日本中が『放射線まみれ』というイメージなんだろう」と嘆息する。(2011.05.22)
- (6) 海水まみれの泥が広がっていた。(2011.04.11)
- (7) 加工工場は津波で床上 2 メートルまで海水につかり、一面が汚泥まみれになった。(2011.04.12)
- (8) 例年なら田植えの時期だが、農機具を失い、土地は塩水まみれ。(2011.05.25)
- (9) 飼い主とはぐれてヘドロや油まみれになっている動物も多いのですが、医療物資は不足気味です。(2011.03.31)
- (10) 同大によると、問題になったのは「セシウムまみれ¹⁰の水田で毒米つくる行為も、サリンつくったオウム信者と同じことをしてる」「福島農家が私を殺そうとしている」などの書き込み。(2011.12.09)

(1) ～ (3) のように「泥まみれの菓子/スーツ/赤いランドセル」の表現があげられる。(4) ～ (10) の「放射能まみれ」「放射線まみれ」「海水まみれ」「汚泥まみれ」「塩水まみれ」「ヘドロや油まみれ」「セシウムまみれ」の用法も見られる。とくに「放射能まみれ」「放射線まみれ」「海水まみれ」「セシウムまみれ」は地震の影響で生まれた用例であろう。このように、社会的な要因により、新しい言葉

⁹ 出典については、日付のみの用例はすべて『ヨミダス歴史館』によって検索したものである。

¹⁰ セシウム：金属元素の一つ〔記号 Cs 原子番号 55〕。銀白色で柔らかい。放射線のセシウム 137 は人体に有害。(『新明解国語辞典』より)

が生まれてくることがある。今回収集した例から、政治的な要因、経済的な要因などから生まれた用例もあった。たとえば、

社会的な要因：放射線まみれ/放射能まみれ/セシウムまみれ
がれきまみれ/花粉まみれ

政治的な要因：リクルートまみれ/汚職まみれ

経済的な要因：バブルまみれ/接待まみれ

5.3 「～まみれ」の前接語の拡大

5.1 では、3つのコーパスを利用して考察を行った結果、文学作品における「～まみれ」の前接語は10～13語のみで、用法がかなり限られていると述べた。しかし、『ヨミダス歴史館』を調査した結果、前接語の語数は210語に拡大し、比喩的な用法もかなりの数が見られるなどバラエティ豊かになっている。

表5 「～まみれ」の前接語（1996～2005 使用度数 10 以上）

『ヨミダス歴史館』 「～まみれ」		『毎日新聞』 「～まみれ」	
前接語	使用度数 (10 以上)	前接語	使用度数 (10 以上)
泥	704	血	811
血	581	泥	278
汗	299	汗	156
油	124	油	107
ほこり	73	金	85
砂	64	スキャンダル	80
金	58	埃・ほこり	64
借金	44	借金	52
雪	44	カネ	49
土	34	土	38
スキャンダル	14	砂	31
汚職	13	雪	27
粉	13	汚職	27
重油	12	煤	20
		重油	17
		糞	13
		疑惑	13
		汚物	10

表5は『ヨミダス歴史館(1996-2005)』と『毎日新聞』(1996-2005)2紙それぞれ10年分の「～まみれ」の用例を収集したものであり、その使用度数が10例以上の前接語の使用状況である。この表から、2紙のどちらも「泥まみれ」「血まみれ」「汗まみれ」「油まみれ」という表現が上位4位となっていること

がわかる。しかし、順番としては、『ヨミダス歴史館』では、「泥まみれ」の用例数が一番多く、『毎日新聞』では、「血まみれ」が突出している。なお、比喩的な用法では、「スキャンダルまみれ」「借金まみれ」「汚職まみれ」「金まみれ」「疑惑まみれ」があげられる。そのうち、『毎日新聞』では、「スキャンダルまみれ」の使用度数が80例もあるのに対し、『ヨミダス歴史館』は14例しかない。これらの点については、何を示唆しているか、まだわからないが、新聞社の記事内容がどちらかに偏っていることが推測される。

5.3.1 具象物から抽象物へ

「～まみれ」は「泥まみれ」「血まみれ」「汗まみれ」「油まみれ」「重油まみれ」などの液体のものや、「砂まみれ」「粉まみれ」「埃まみれ」「雪まみれ」などのような細かいものなどと結合して使われるのが本来の用法である。一方、「借金まみれ」「スキャンダルまみれ」「汚職まみれ」「疑惑まみれ」などのように、比喩的にも使われるようになった。以下、用例をあげておく。

- (11) 借金まみれで出奔を重ねるとばく男老母の葬式も隣人たちが出す／東京・牛込（1877.03.03）
- (12) 高級ブランドの服などを買いいさり、借金まみれになって自己破産――。（1991.07.02）
- (13) 思惑通りに経済が成長して税収が増えなければ、借金まみれの国の財政が一段と悪化するだけの結果を招くことになる。
（2013.01.10）
- (14) 数年前までは事業の失敗などで借金と酒まみれの生活だったという。（2007.01.15）
- (15) 腐敗や汚職まみれの自治政府を变革、行財政の透明性と民主化を確保することも和平前進の重要な要素。（2003.06.05）
- (16) 疑惑まみれのサンペル氏をかつぐ限り、出口は見えないという憂慮が姿勢変化を促したといえる。（1996.01.26）
- (17) スキャンダルまみれの国際オリンピック委員会（IOC）は、臨時総会（12月・スイス）で、委員の定年を80歳から70歳に引き下げた。（1999.12.28）
- (18) 子どもたちはファストフードを中心に脂肪と糖分まみれの食生活を送っている。（2014.08.22）
- (19) 作業施設内には、扇風機などを設置して、舞った羽毛の回収を早め、作業者が羽毛まみれにならないようにする。
（2014.05.27）
- (20) 砕いた大豆から作った汁を布こし、豆乳とおからに分ける工程では、布を絞る子供たちの手はおからまみれ。「手が疲れた」などと言いながらも、生き生きとした表情を見せていた。

(2002. 08. 07)

- (21) ガラス片まみれの座布団、電気を切った冷蔵庫内の食品など、ごみは 15 袋分に上り、熊懷さんらボランティア 4 人がかりでも約 1 時間半かかった。(2005. 03. 28)

(11) ～ (14) は「借金まみれ」の用例であるが、そのうち、(11) は 1877 年 3 月 3 日の記事で、今回の調査範囲では、「借金まみれ」の一番最初の例である。平成に入るまで、「借金まみれ」はこの用例しか検索することができなかったが、「借金だらけ」の用例は 6 件あった。「借金まみれ」が再度現れたのは 1991 年 7 月 2 日の記事となった。この点から、「借金まみれ」といった表現は 1990 年代から定着し始めたと考えられる¹¹。(15) ～ (18) の用例は、「腐敗や汚職まみれの自治政府」「疑惑まみれのサンペル氏」「スキャンダルまみれの国際オリンピック委員会」「脂肪と糖分まみれの食生活」のような比喩的な用法としてあげられる。(19) ～ (21) の「羽毛まみれ」「おからまみれ」「ガラス片まみれ」は、「泥まみれ」「血まみれ」「汗まみれ」「砂まみれ」「粉まみれ」「埃まみれ」などと同様に、具象物と結合する用法である。

また、使用度数はやや少ないが、(22) ～ (27) のように、「デジタルまみれ」「自尊心まみれ」「ノイズまみれ」「メディアまみれ」「物欲金欲まみれ」「欲望まみれ」などの用例も見られる。

- (22) 携帯型ゲーム機などが普及し、子どもたちの世界は今やデジタルまみれの様相だが、お手玉、あやとり、竹馬といった昔ながらの遊びを楽しむ子どもたちが少しずつ増えている。

(2007. 02. 07)

- (23) 著者の目からは、フェルミですら想像力の欠けた単なる「量子技師」で自尊心まみれの独裁者に成り下がる。(2013. 07. 07)

- (24) ノイズまみれのパンクロックと言える「N a g N a g N a g」や、ミニマル音楽を思わせる「Kneel To The Boss」など、青

¹¹ 2014/01/01～2014/12/31 の期間に絞って検索してみると、「借金まみれ」(約 63, 600 件)、「借金だらけ」(約 9, 210 件) となり、「借金だらけ」より「借金まみれ」のほうが多かった。

臭いまでに「斬新な音を作ろう」という思いが反映した初期の曲が面白い。(2014. 07. 31)

(25) 赤い喪服の二百回忌など、悪夢のようにグロテスクだ。テレビや活字などメディアまみれの、映像的ハイテクノロジーの土俗である。(1994. 06. 14)

(26) たまたま高度経済成長という物欲金欲まみれの社会が走り出していた。(1996. 02. 18)

(27) 欲望まみれの世界を突き進むヒロイン、りりこの物語。原作は、岡崎京子の同名漫画。(2012. 03. 21)

このような比喩的な用法は、「～まみれ」が接尾辞化する傾向にあるという証左と考えられる。たとえば、「砂まみれ」は「砂にまみれる」に還元できるが、「自尊心まみれの独裁者」を「自尊心にまみれた独裁者」には還元しづらい。「まみれる」という動詞が、具体的な物質が付着するという実質的な意味を持っているからであろう。逆に言えば、「自尊心まみれの独裁者」の「まみれ」は、実質的な意味の一部を失っていると言えるのである。

5.3.2 マイナスイメージからプラスイメージへ

「～まみれ」はマイナス評価に使われるとされているが、「汗まみれ」「泥まみれ」などマイナス評価の語も、文脈によって、プラス評価に変わる可能性を内包している。次に用例をあげておく。

(28) 箱根を一気に下る復路の6区では、足を血まみれにしながら中継所に滑り込む選手もいた。(1994. 12. 26)

(29) 県建築士会水沢支部が「建築士の日」にあわせ、子供に物作りの楽しさと建築士の仕事を知ってもらおうと、毎年、同園で行っている行事。園児は建築士と一緒に手をペンキまみれにしながら自分たちのお城を完成させた。
(2003. 08. 23)

(30) 手や顔を絵の具まみれにしながら楽しむ子もいて、大阪市東成区の小学3年吉塚佳奈さん(8)は「絵の具をいっぱい使って描けて楽しかった」と話した。(2007. 05. 06)

(31) 前日から降り続いた雨の影響でグラウンドはあいにくの状態。
選手たちは足を取られる場面もあったが、ユニフォームを泥まみれにしながら懸命にボールを追いかけていた。

(2003. 06. 02)

(32) その後、大学卒業とともに「自然に会社に入った」といい、
若い時は、粉まみれになって工場でビスケットを作った。

(2002. 04. 28)

(28) ～ (32) のように、「～まみれ」は「～まみれにしながら／～まみれになって」のような副詞成分（連用修飾）として使うことも多く見られる。文脈からわかるように、これらの用例は「何かが体（体の一部）やものに付着する場合」の表現である。それぞれ「～に塗れながら／～に塗れて」のように還元できる。(31) の「ユニフォームを泥まみれにする」は、確かに泥に汚れるというマイナスイメージの表現ではあるが、後半は「懸命にボールを追いかけていた。」と続き、全体としては「努力」「一所懸命」という感情が含まれたプラス表現である。このような表現が多く使われていくと、「～まみれ」が必ずしもマイナス評価に使われるとは限らない状況が生まれてくる可能性がある。現に、「ねぎまみれ」「トマトまみれ」「猫まみれ」「スイカまみれ」のような中立的な評価の表現も見られる。

5.4 「～だらけ」との比較を通じて

『ヨミダス歴史館』10 年分（1996-2005）の記事から収集した「～まみれ」と「～だらけ」の用例数によって前接語の使用状況进行分析すると、両方に使われる前接語（48 語）、「～まみれ」のみの前接語（70 語）と「～だらけ」のみの前接語（797 語）のように分かれる。表 6 と表 7 はその内容の一部である¹²。本節では、まず、どちらにも使われる前接語の使用実態を見ていきたい。

表 6 に示されているように、「泥まみれ」「血まみれ」「汗まみれ」「油まみれ」が圧倒的に多く、「埃まみれ」「砂まみれ」「雪まみれ」

¹² 「傷だらけ」（368 例）と「ごみだらけ」（76 例）は、「傷まみれ」が 1 例、「ごみまみれ」が 2 例だったので、表 6 には含まれていなかった。

「借金まみれ」「土まみれ」「すすまみれ」「汚職まみれ」などの使用例も見られる。一方、「～だらけ」は「泥だらけ」「血だらけ」の用例数がもっとも目立っている。

表 6

『ヨミダス歴史館』1996～2005（10年分） 「～まみれ」「～だらけ」 ※前接する前接語（「～まみれ」5例以上）					『分類語彙表』による分類		中項目	大項目
前接語	～まみれ 用例数	～だらけ 用例数						
1 泥	794	969	L.5111 鉱物	L.51 物質	自然物および自然現象			
2 血	581	406	L.5607 体液・分泌物	L.56 身体	自然物および自然現象			
3 汗	299	9	L.5607 体液・分泌物	L.56 身体	自然物および自然現象			
4 土	124	5	L.5111 鉱物	L.51 物質	自然物および自然現象			
5 灰	73	40	L.5112 さび・ちり・塵・灰など	L.51 物質	自然物および自然現象			
6 砂	64	34	L.5111 鉱物	L.51 物質	自然物および自然現象			
7 雪	44	9	L.5153 雨・雪	L.51 物質	自然物および自然現象			
8 借金	44	32	L.3780 貸借	L.37 経済	人間活動—精神および行為			
9 土	36	10	L.5111 鉱物	L.51 物質	自然物および自然現象			
10 汚職	13	3	L.5440 犯罪・罪	L.54 行為	人間活動—精神および行為			
11 粉	13	19	L.5106 物体・物質	L.51 物質	自然物および自然現象			
12 スス	21	44	L.5112 さび・ちり・塵・灰など	L.51 物質	自然物および自然現象			
13 赤字	8	4	L.3710 経済・収支	L.37 経済	人間活動—精神および行為			
14 疑念	7	4	L.3061 思考・意見・観 L.3021 敬意・感謝・信頼 など	L.30 心	人間活動—精神および行為			
15 灰	7	4	L.5112 さび・ちり・塵・灰など	L.51 物質	自然物および自然現象			
16 ベンキ	7	10	L.4541 日用品	L.45 道具	生産物および用具			
17 花粉	4	1	L.5410 枝・葉・花・実	L.54 植物	自然物および自然現象			
18 機関	4	1	L.3142 評判	L.31 言語	人間活動—精神および行為			
19 薬	4	1	L.4560 薬剤・薬品	L.45 食料	生産物および用具			
20 糞（フン）	4	11	L.5607 体液・分泌物	L.56 身体	自然物および自然現象			
21 ヘドロ	4	2	L.5111 鉱物	L.51 物質	自然物および自然現象			
22 垢	3	4	L.5607 体液・分泌物	L.56 身体	自然物および自然現象			
23 泡	3	19	L.5130 水・乾湿	L.51 物質	自然物および自然現象			
24 カビ	3	17	L.5405 腐敗植物	L.54 植物	自然物および自然現象			

表 7

『ヨミダス歴史館』10年分（1996-2005） ～だらけのみの前接語（10例以上）			『ヨミダス歴史館』10年分（1996-2005） ～まみれのみの前接語（4例以上）		
	前接語	～だらけ 用例数		前接語	～まみれ 用例数
1	不安	151	1	金	58
2	穴	134	2	スキャンダル	15
3	わからないこと、わからない事 分らないこと	114	3	重油	12
4	まちがい、間違い	99	4	利権	8
5	アザ、あざ、痣	82	5	虚構	5
6	矛盾	75	6	原油	5
7	マメ、まめ、豆	63	7	石油	4
8	シワ、しわ、皺（しわ）	56	8	接待	4
9	ナゾ、なぞ、謎	55	9	セメント	4
10	ツギハギ、つぎはぎ、雑ぎはぎ	51	10	毒	4

紙幅の関係で、表 6 にある「血まみれ（581 例）/血だらけ（406 例）」「汗まみれ（299 例）/汗だらけ（9 例）」と「借金まみれ（44 例）/借金だらけ（32 例）」などの比較を通して、「～まみれ」と「～だらけ」の意味・用法の相違を考察していく。

(33) 上矢部に敗れ、唯一の三年生寺井太一主将は「最後の夏で横浜に勝てないものか、ずっと考えていた」と目に涙を浮かべた。「優勝するつもりだったの」と聞くと、「どんな境遇でも、高校球児の目標は甲子園です」と汗まみれの顔がほころんだ。球児の純粋な大志を知った。(2002.07.24)

(34) 昨年八月の開催前に、商店街の一部から、商品を提供するという話があり、部員たちは炎天下の中、汗まみれになりながら、商品を運んだ。これを見た宇田さんは、「悪い高校生ばかりではないのだ」と見直したという。それ以後、部は商店街で掃除をしたり、花を植えたりと積極的に活動した。評判もよくなった。(2002.06.08)

(33) の「汗まみれの顔」は「汗だらけの顔」に言い換えられるが、ニュアンスが異なってくる。「汗だらけの顔」は単に顔が汗で汚れている表現に止まるが、「汗まみれの顔」で表現すると、日々甲子園を目標にして努力している球児たちの気持ちが十分に表現できている。(34) も同様に、「汗まみれになりながら、商品を運んだ。」は、「努力している、頑張っている」の意味が含まれているのに対し、「汗だらけになりながら、商品を運んだ。」に置き換えると、ただ汗だけで商品を運んでいる状況を説明しているだけになっている。それに続く文脈によると、「一所懸命仕事をしている、頑張っている」といった意味が含まれているため、「汗まみれになりながら」を用いたほうが自然だと思われる。汗は汚いもので、「汗だらけ」の用法は単なる事物の状態描写であるのに対し、「汗まみれ」は「努力」「一所懸命」の意味も含まれ、汚い感じが薄れる。「汗まみれ」は「汗にまみれている」に還元できることから、「～まみれ」は動作性が残っていると考えられる。つまり、「汗を流している」という動的過程の描写となる。「汗だらけ」は本来「汚い」汗というイメージが残っており、汚れた感じがする表現になる。

(35) その効果でカットの腕はめきめき上達。でもカミソリがからっきしだった。もともと手先が不器用。客の顔を血だらけにする度、店主から雷を落とされた。「お前のカミソリは村正か」。名刀に例えた皮肉だ。悔しい。血のにじむ練習を始めたのはそれから。「にじむ」どころではなく、自ら血まみれになる特訓だった。(2010.02.23)

なお(35)の文脈から判断できるように、「客の顔を血だらけにする」を「客の顔を血まみれにする」と置き換えることができるが、「客の顔を血まみれにする」は故意に客の顔を傷つけるという意味も含まれており、やや不自然さを感じる。逆に、「自ら血まみれになる特訓だった。」とは、やや誇張した比喩的な用法となり、「血だらけ」に置き換えられないと考えられる。

次に「借金まみれ」(44例)と「借金だらけ」(32例)の相違を考

察する。

(36) 借金まみれの政府、しかも底冷えの不況が日本を包んでいた。(1996. 03. 23)

(37) しかし、自己破産しても、再び借金まみれになる“借金依存症”の人の存在も指摘されている。(2000. 05. 26)

(36) (37) は「借金まみれ」の用例である¹³。それぞれ「借金だらけ」に置き換えられるが、「借金まみれ」の方が「身体にまわりついている」という比喩的なニュアンスが内包されているため、「借金にまみれて多重債務で非常に困っている」というイメージも含まれる。「～だらけ」よりインパクトが大きい。「借金だらけ」は、借金がいっぱいあることを表しているという状態の描写にのみ焦点が置かれている。

(38) 昭和三十三年製の自転車で、車体はサビだらけ、ギアなどの部品はつぎはぎという傷まみれの姿だったが、フレームは製造当時のまま。(1988. 09. 24)

(38) の「サビだらけ」は「自転車の車体には、さびがいっぱいで、汚い」という描写であり、「傷まみれの姿¹⁴」は、長い年月を過ごしてきた自転車の歴史を感じさせる誇張した表現である。単にあちこち傷が付いているだけではなく、長い年月を重ねて自転車についた傷であるから、「傷まみれの姿」と表現したほうが自然だと考える。なお、「傷まみれの姿」は、「傷だらけの姿」に置き換えると、比喩的な用法ではなくなり、「傷がいっぱいである」といった静的状態の描写になる。どちらを使ってもいい場合は、文脈や書き手の意図によって選ぶことができる。また、表 2『どんな時どう使う日本語表現文型 500』では「傷まみれ」は使えないものとしてあげられている。このような付着する場合以外にも使うということは、「まみ

¹³ 居酒屋など 8 店舗を手広く展開したもののバブル崩壊で借金まみれになった時、助けてくれたのが母校・宮城工業高校サッカー部の先輩や友人たちだった。(2012. 07. 26) これも「借金にまみれて多重債務の日々を過ごしている」という大変な状況が伺える用例である。

¹⁴ この用例のほか、「傷まみれの青春」という歌の名前が検索できた。「傷まみれ」が 2 例しかなかったことから、「傷だらけ」(368 例) の用法が中心であると言える。

れる」が本来持っている実質的な意味に変化が起こっているとも言え、「～まみれ」の接尾辞化の傾向の一斑だとも言えよう。

(39) 映像は、うっそうとした森の中に薄気味悪い小屋が建っているシーンから始まります。中はクモの巣だらけ。(1996.03.04)

(40) 当時の八千代座は使われる機会も少なく、床板や天井板がはがれてクモの巣だらけ。まるでお化け屋敷のようだった。
(2004.05.10)

(41) しかし、手入れがされていなかった屋敷は荒れ放題。(中略)
土蔵はほこりとクモの巣だらけ。庭は雑木に覆われていた。
(2002.11.05)

(42) 倉庫は約 1500 平方メートル、天井まで 8 メートルの広々とした空間。55 年前につくられたしろもので、ホコリが積もり、クモの巣だらけだったが、仲さんは「大阪の真ん中にこの広さ。おもしろいことになる」と直感した。(2004.10.27)

(43) ある日、近所で電気の調子が悪くなった家があった。連絡を受けた洋文さんは、「どれどれ」と自ら天井裏へ上り、くもの巣まみれになって修理した。(2006.09.20)

(39) ～ (42) は「クモの巣だらけ」の表現が用いられている。それぞれの文脈からわかるように、「ある空間（小屋、八千代座、土蔵、倉庫）に、クモの巣がいっぱいあって、汚い」という状態を描写している。それに対して、(43) は「(電気を修理するために)ある人がくもの巣にまみれて、顔や体が覆われている」といった動的過程を説明している。つまり、「～だらけ」と異なって、「～まみれ」は必ず、人やもののほぼ全面にべったりと付着する場合に用いられる。

(44) 解体して青森から持ってきたという本物の小屋も一つ設置してあり、クモの巣や穴だらけの廃材を巧みにつないだ“造形”を、じっくりと味わうことができる。(2000.07.24)

(45) 同会幹事長で同校物理教諭でもある筒井裕芳さん(45)(七三年卒)は、振り返る。{つぎはぎだらけ／？つぎはぎまみれ}

の床の上で、剣道のけいこをした高校時代を懐かしむ。

(2001. 03. 03)

(46) 「コピペまみれの報告書に 73 万円を支払う価値はあるのか」

(2014. 07. 04)

(44) にある「クモの巣や穴だらけの廃材」といった表現も同様に解釈できる。「クモの巣や穴まみれの廃材」に置き換えると、不自然になる。くもの巣や穴が目に見えるもので、「廃材に塗れるのではなく、廃材のあちこちにある」と考えられる。(45) は「つぎはぎだらけの床」を「つぎはぎまみれの床」に置き換えると、違和感を覚えるようになる。「穴」や「つぎはぎ」が付着するものではないため、「まみれ」は使えない。ただし、(46) の「コピペまみれの報告書」といった皮肉を用いた表現は成り立つ。

これまでの考察により、4.2 で整理した「～まみれ」と「～だらけ」の記述を表 8 のように修正してみた。表 8 で示されているように、「～まみれ」も「～だらけ」も、マイナス評価だけではなく、プラス評価としても使うことができる。なお、比喩的な用法としては、「～だらけ」より「～まみれ」の方が使いやすいようである。「～まみれ」は、「に塗れる／に塗れている」のように還元でき、本来の動詞の持つ動作性が、「～まみれ」の意味に影響を与えていると言える。一方、「～だらけ」は「名詞＋接尾辞（だらけ）」によって構成された複合語で、「～まみれ」のような動作性がなく、「どこどこに何かがたくさんある」といった静的状態の描写となっている。「～まみれ」は「だれだれ（どこどこ）に何かがたくさん付着している」といった動的状態の描写から、さらに「比喩的な用法」に拡張したといえる。このような比喩的な用法、誇張した言い方は増加傾向にある。このように、接尾辞化している「～まみれ」は、類義語である「～だらけ」と意味分担を果たしながら、近年徐々に抬頭してきている。「～だらけ」の存在によって、「～まみれ」の接尾辞化が弱化されたのではいかと思われる。

表 8¹⁵

前項成分の意味特徴と その意味用法	「～まみれ」	「～だらけ」
液体、粉末など汚いもの	✓✓	✓
量がたくさんある様子	✓	✓
一面に付着しているもの	✓✓	✓
マイナス評価	✓	✓
プラス評価	✓	✓
比喩的な用法	✓✓	✓
動的状态の描写	✓	
静的状态の描写		✓
名詞に付く	✓	✓
名詞句に付く		✓

5.4.1 『分類語彙表』による「～まみれ」「～だらけ」の意味特徴

本稿では、「～だらけ」の用例数（10 例以上）の前接語を『分類語彙表』に基づいて、その分類を試みた。結果は図 9 で示されるように、「抽象的關係」（34.29％）に属す前接語が一番多く、続いては「自然物および自然現象」（31.43％）、「人間活動—精神および行為」（28.57％）となり、「生産物及び用具」が 5.71％のみであるという結果が得られた。

図 9

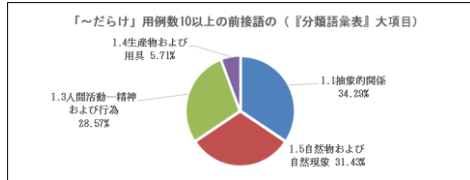
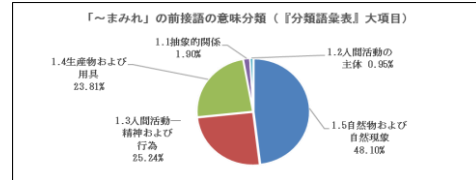


図 10



「～まみれ」の前接語の意味分類は図 10 で示されているように、「自然物および自然現象」（48.10％）が圧倒に多いといえる。そして、「人間活動—精神および行為」（25.24％）、「生産物および用具」（23.81％）、「抽象的關係」（1.90％）、「人間活動の主体」（0.95％）の順となっている。これにより、前接語が「抽象的關係」に含まれるものが一番多い「～だらけ」とは性格が異なっていることがわかる。

5.4.2 「～だらけ」のみの前接語

「～だらけ」は「～まみれ」より使用制限が少なく、かなり多くの前接語と結合することができるが、「～まみれ」のみの表現もあ

¹⁵ 表 8 にある記号「✓✓」は、記号「✓」より使用される頻度が多いことを表す。

られる。たとえば、「スキャンダルまみれ」「金まみれ」などである。「～まみれ」は「～にまみれる」のように還元できる表現であるため、必ず塗れるもの、付着するものでなければ、使えないのに対し、「～だらけ」は、必ずしも付着する性質のものでなくても使うことができる。どちらにも使われるものもあるため、両者は競合関係にあると思われる。以下、「～だらけ」のみの前接語をあげておく。

(47)

- 1) 人物（日本人、中国人、病人、若者、知らない人...）
- 2) 不安、不備、不足、不満、不服、不信、ウソ...
- 3) 穴、欠点、間違い¹⁶、欠陥、欠点、失敗、故障、でたらめ、短所、矛盾、トラブル...
- 4) 偽り、ごまかし、悩み、染み、痛み、悔い...
- 5) わからないこと、足りないこと/ところ/もの、知らないこと、心配なこと、恥ずかしいこと、おかしいこと、不可解なこと...
- 6) いいこと、楽しいこと、喜び、ユーモア

(47) の 1) ～6) の前接語は、「～まみれ」に置き換えられないものである。また、マイナスイメージのものがほとんどであるが、「いいことだらけ、楽しいことだらけ、ユーモアだらけ、喜びだらけ」のように、プラスイメージの用法も見られる。これらの前接語は、「付着してくる」ものではないのが特徴である。しかし、「～だらけ」は「～まみれ」と違って、「不安だらけ」や「間違いだらけ」のような、「付着する性質がないもの」か、「分からないことだらけ」「知らないことだらけ」のような「抽象的關係」の語と結合することができる。逆に、「抽象的關係」の語は「～まみれ」と結合しにくいと言える。

(48) 駆け出し時代、どこへ取材に行くにも 不安だらけ だった。で

16 「間違いだらけの褥瘡治療」「間違いだらけのアトピー治療」「間違いだらけのお墓選び」「間違いだらけのクルマ選び」「間違いだらけのリフォーム業者選び」「間違いだらけの糖尿病の常識」など、「間違いだらけ」を含む本の名前があげられる。また、「間違いだらけの英語／発言／健康管理／子育て子供の食卓／医者選び／学術誌の査読システム／洋服・下着選び／食べ物選び／健康常識／教科書／転職活動／温泉選び／環境広告...」のように、「間違いだらけ」を一つのまとまりとみなすことができる。

も、香川の人は実に温かい。(2003.02.01)

(49) 人間の脳は、まだわからないことだらけ。「最後のフロンティア」とも呼ばれるほどだ。(1999.10.25)

(50) (略)「毎晩打ってもらっているんだけど、今晚は受けられないので昼間に打ってもらった。(右手の甲を見せながら)ほら、あちこち打たれて穴だらけだ」(2000.09.27)

(48) ～(50)の前接語は「～だらけ」と結合することができるが、「～まみれ」と結合することができない。本稿では『ヨミダス歴史館』による検索用例を基準に判断したものであるが、「Googl」での検索例があった。たとえば、「不安、うそ、ストレス¹⁷、トラブル」などである。この点から、「～まみれ」の用法が今後、「～だらけ」と競合しあいながら発生し、「～まみれ」がさらに「接尾辞化」していくと予測される。

6. まとめ

本稿では、和語動詞「まみれる（塗れる）」の連用形「まみれ」の接尾辞化現象について、複数のコーパスを利用して、その考察を行った。とくに『ヨミダス歴史館』における「～まみれ」の用例を通して、その使用度数が増加傾向にあるということを明らかにした。また、「～だらけ」との比較から、「～まみれ」と「～だらけ」は競合関係にあると考えられるが、両者は似ている用法もあれば、それぞれ異なった前接語と結合する場合もあることもわかった。

「～だらけ」は「～まみれ」より使用制限が少なく、かなり多くの前接語と結合することができるが、「～まみれ」のみの表現もあげられる。たとえば、「スキャンダルまみれ」「金まみれ」などである。「～まみれ」は「～にまみれる」のように還元できる表現なので、必ず塗れるもの、付着するものでなければ、使えないのに対し、「～だらけ」は、必ずしも付着する性質のものでなくても使うことがで

¹⁷ 『ヨミダス歴史館』からは、「ストレスまみれ」は2例しか検索できなかった。

きる。このように、両者は競合関係にあると思われる。

「～まみれ」も「～だらけ」も、マイナス評価だけではなく、プラス評価として使うこともできる。なお、比喩的な用法としては、「～だらけ」より「～まみれ」の方が使いやすいと思われる。それは、「～まみれ」は「に塗れる／に塗れている」のように還元でき、本来の動詞の動作性が、「～まみれ」の意味を左右している。一方、「～だらけ」は「名詞＋接尾辞（だらけ）」によって構成された複合語で、「～まみれ」のような動作性がなく、「どこどこに何かがたくさんある」といった静的状態の描写となっている。「～まみれ」は「だれだれ（どこどこ）に何かがたくさん付着している」といった動的状态の描写から、さらに「比喩的な用法」「誇張した言い方」へと、用法の幅を拡張してきている。接尾辞化している「～まみれ」は、類義語である「～だらけ」と意味分担を果たしながら、近年徐々に抬頭してきたと考える。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人ための日本語文法ハンドブック』株式会社スリーエーネットワーク、P. 537-538
- 影山太郎（1989）「形態論・語形成論」『講座 日本語と日本語教育 11 言語学用説（上）』明治書院、P. 60-92
- 神作晋一（2009）「「接尾語～だらけ」「～まみれ」の動向」『日本近代語研究』5 ひつじ書房、P. 103-122
- 国立国語研究所（2004）国立国語研究所資料集 14『分類語彙表-増補改訂版-』大日本図書刊
- 杉岡洋子（2005）「名詞化接辞の機能と意味」『現代形態論の潮流』編者大石強・西原哲雄・豊島庸二くろしお出版、P. 75-94
- （2006）「語や接辞の意味が語形成に果たす役割」『日本語学』5月号 25-6 明治書院、P. 64-74
- 玉村文郎（1985）『日本語教育指導参考書 13 語彙の研究と教育（下）』

大蔵省印刷局

陳世娟 (2013)『動詞連用形を後項要素とする複合語の研究—品詞転成と意味・用法をめぐって—』大新書局、P. 36-38

友松悦子(著), 和栗雅子 (著), 宮本淳 (著) (1996)『どんな時どう使う 日本語表現文型 500』(アルク/大新書局)、P. 22-23

西尾寅弥 (1988)「複合名詞と造語法」『現代日本語の語彙』明治書院、P. 103-120

山下喜代(1994)「語の構成要素—国語辞典における『造語成分』について—」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』6 早稲田大学、P. 71-102

—— (1995a)「国語辞典における語構成要素の扱いについて」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』7 早稲田大学、P. 77-108

—— (1995b)「形態素と造語成分」『日本語学』Vol. 14-5 明治書院、P. 238-247

参考辞書

『日本国語大辞典』小学館

『大辞林』三省堂

『大辞泉』小学館

『新版日本語教育事典』(2005) 大修館書店

『新明解国語辞典』(2013) 第7版 三省堂

『明鏡国語辞典』(2002) 初版 大修館書店

『日本語文型辞典』(1998) くろしお出版

『日本語文法大辞典』(2001) 明治書院

『日本語学研究事典』(2007) 明治書院

付記 本稿は 2015 年 3 月 9 日に台湾大学で行われた「2015 年語彙研究会特別大会」で発表した内容を修正・加筆したものです。当日、大変有益なコメントをいただき、心より感謝の意を表します。また、審査の段階で、査読者の先生方より貴重なご指摘とご助言をいただき、心よりお礼申し上げます。